

東京バッハ合唱団 月報

[第 596 号] 2012 年 2 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 郵便振替：00190-3-47604
Tel：03-3290-5731 Fax 専用：03-3290-5732
mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.596

February 2012

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

創立 50 周年の、年の始めに 東日本災害で得た貴重な出会い

大村 恵美子

福島県南相馬市にお住まいの方々から呼びかけられた、放射能汚染地域に住む子どもたちの生活を救おうという署名運動に応じたのがきっかけで、私は、詩人の若松丈太郎氏と出会うことになりました。

東京で市民運動を展開しておられ、この呼びかけを取りついでくださった西野健一氏も、福島にお一人住まいのお母様の近くに居を移され、東北と東京とを結び合わせる将来を見すえようとしておられます。皆様から託された署名を年末すでにお送りし、今後の継続的な交流をめざすために、私は新年最初の連休を、仙台訪問にあてました。

まず、新年第 2 週の礼拝を仙台北教会（日本キリスト教団）で迎え、当教会でオルガニストもしておられる宗教学者の川端純四郎氏とお会いしました。バッハの《口短調ミサ曲》について、じつに明快な論述でお励ましいただいた先生に、またお近くにご自宅のある宮田光雄先生にも、お年賀を申し上げたかったです。お二方とも震災の被害をお受けになられました。

1 月 8 日（日）、9 時半の教会学校礼拝から参列、川端先生のエジプトのモーセについてのお話を子どもたちと一緒に伺いました。子どもたちはとても元気よく、「こどもさんびか」もたくさん、大きな声で歌いました。おまけに礼拝後は、臼と杵でお餅つきをするのが伝統となっているとのこと。教師方が先導、子どもたちもみんな加わりました。大人の礼拝の始まるわずかな合間に、やわらかい搗きたてのお餅を、3 種類のお味でいただきます。

大人の礼拝は、美しい会堂、ギャラリーに設置されたパイプオルガンで、これもまた新年にふさわしい讃美歌をたくさん歌い、感謝の働きを促すような明るいお説教（小西望牧師）もうかがいました。

礼拝後は、さきほどのお餅やおむすびが振る舞われ、つづくコーヒータ임には、モンゴルからの留学生によってモンゴルの音楽（馬頭琴、詩朗読、ピアノ）が始まるという、目白押しのスケジュールです。教会の意欲がはっきりとうかがえるアクティブな印象でした。

残念ながら、それがまさに佳境に入ろうとするときに、川端先生は、私の予定のために抜け出さなければなりません。ややご近所に位置する宮田光雄先

生（政治学・政治思想史の研究者）のご自宅への訪問でした。この後には福島在住の別の方々との面会が予定されているため、ほんとうに短いお話し合いでしたが、宮田・川端両先生の明るい闊達な雰囲気の中で、私の生涯に残るような楽しいひとときを共有させていただけました。

宮田先生からはこの機会にも、ドイツで 2005 年に出版された《Die Freiheit kommt von den Tosa-Bergen》（自由は土佐の山間より）というご著書をプレゼントされました。ちなみに宮田先生は“土佐”のご出身、日本とドイツにおける国家主義の克服への寄与と題された副題がついていました。これは、ボンンヘッファー研究会のお仲間でもある小海先生（荻窪教会牧師、当団員）にでも、さっそく要約・解説程度のご紹介をしていただけたら……と思ったりしています。

暮には川端純四郎先生から、ほやほやの新刊『さんびかものがたり』をご寄贈いただき、その中に多く含まれるドイツコラールは、私の『バッハ コラール・ハンドブック』とも大いに関連があるので、もう少し以前からお会いする機会があったら、と思ったりしました。まあ、何もかも好都合に運ぶものではなく、杉山好先生の場合は、あの本の出版と時を移さずして他界なさってしまわれました。

仙台駅近くに予約していただいたホテルで一息つ

《口短調ミサ曲》日本語演奏 初演

ライブ録音 CD 発売 !!

2 枚組・当日プログラム付き 2500 円（送料別 150 円）

< 録音/制作：(有)パラビジョン >

去る 12 月 3 日に開催されました創立 50 周年記念公演 [1] (第 106 回定期演奏会) の会場録音 CD が出来上がりました。

事務局までお申込みください。郵便振替用紙同封にてお送りします。(お申込み先：月報タイトル囲み内をご参照ください)



いたあとは、一人旅の私をいたわられてか、福島からわざわざ仙台まで出向いてくださった、西野・若松両氏をお迎えしました。西野さんは10年来の同志で、私の東北訪問をきめ細やかにセッティングしてくださり、若松氏との初対面も実現させてくださいました。12月に合唱団関係から託されたカンパ(支援金10万円)を若松氏にお渡しし、またこのたびの《口短調ミサ曲》公演(12月3日、杉並公会堂)のDVDを、メインのおみやげとして差し上げることができました。

これは、今回の録音・制作を担当してくださったパラボジョンの竹内恵氏が、会場の録音ブースから固定カメラで撮影しておいたものを、東北の方々へのお励ましになるならと、10セット複写してご寄贈くださったもので、この日に間に合うようにと団員の宮城さんが、外装を用意してくださり、出発当日にお届けくださったものでした(残念ながらDVDは非売品です)。「コラール 心よりわれこがれ望む」と題する詩をお書きになるほどバッハの音楽が大好きとおっしゃる、詩人の若松丈太郎氏はことのほかお喜びでした。

上の詩篇をふくむ詩集『越境する霧』(2004年刊)と、“3.11”の後に急遽おまとめになった詩文集『福島原発難民(南相馬市・一詩人の警告1971年-2011年)』(2011年5月刊)という貴重な2冊のご著書をいただきました。後者は副題のとおり、東京電力・福島第一原発が本格稼働を開始した1971年から書きためられた、詩や記事による警告の数々です。巻頭の詩「みなみ風吹く日」は、

2007年11月
福島第一原子力発電所から北へ25キロ
福島県南相馬市北泉海岸
サーファーの姿もフェリーの影もない
世界の音は絶え
南からの風が肌にまとう
われわれが視ているものはなにか

[作品は縦書き、数字は漢数字]

と終わっていますが、これは“あの日”の3年半ほど前の、詩人の視野に映った風景です。

* * *

こんなにたくさんのお土産を託され、こころを直接通わせ合うことのできた、このたびの旅行は、私にとって貴い経験となりました。“3.11”のダメージは、私たちが今後、一生償っても終りません。孫子の代までかかって、日本を立て直すのです。そのために、力を生み出すような新しい交わりが得られ、生来オプティミストでもある私ですが、いっそう心躍る前進の春となりました。

翌9日(月)は、仙石線に乗って、現在行き止まりとなっている「松島海岸」まで訪れ、修復中の瑞巖寺や、商店街の忍耐づよい復活ぶりにエールを送りながら、帰京しました。(主宰者)

第106回定演をふり返って

バッハを合唱するということ(その2)

村山 英司(団員・テノール)

1. 舞台上ではどんな演奏であったかわからない

演奏会直後の打ち上げ会や12月19日のクリスマス会では、演奏のできが良かった、感動的だった等の声が大半であったし、演奏会場でのアンケートも好評のようだったが、本当のところはどうだったのだろう。あら探しにも似た意識も抱えながらおそるおそる実況音源のCDをセットした。ところが、冒頭のキリエの大合唱で耳を疑った。実に気迫のこもった響きでソプラノによる上昇音階も美しい。テノールからの合唱フーガの入りも大丈夫、なんととってもゆったりと落ち着いたテンポにのって整然と曲は進んでいる。自分がミスしたはずの箇所も破綻は生じず、うまく補われているようだ。オケと合唱との音量のバランスも悪くない。しばらく聴いているうちになんだか「ぐっ」ときている自分に気がついた。個々の声こそ聞き分けられないが、合唱団の皆が懸命に歌っている姿が浮かんできて仕方がない。

2. 演奏のテンポについて

指揮者の強く意図したとおり、全体のテンポ設定は緩急がきわだっており、ゆったりと整然かつ朗々と奏でる曲と熱狂的にテンポアップして駆け出す部分が非常にはっきり分かれている。昨年5月の荻窪音楽祭の演奏と比べても、曲毎のテンポのメリハリがはっきりしている。

第1曲「キリエ」は冒頭合唱に迫力があり、以後もゆったりとした落ち着いたテンポで終止安定している(リヒターの演奏時間に近い)。第9曲b「み霊とともに」は悠揚迫らぬまさに整然とした演奏で、合唱フーガのメリスマも良いリズム感で前半の最後を締めている(手持ちの音源の中では最も遅い)。第18曲a「聖なるかな」もゆったりとしているのだが、三連音の歌い方がモゴモゴと歯切れが悪い上に、パスが弱い。第19曲、第21曲「ホサンナ」は落ち着いた演奏である。第23曲「平和をわれらに」は第6曲「み神に謝しまつらん」に比べて非常にゆっくりとしたテンポであり、ミサ曲の最後を感動的に締めくくっている(これも手持ちの音源の中では最も遅い)。

逆に第10曲「われ信ず」は相当に速い。第15曲「主は甦りたもう」では、指揮者の猛烈なテンポアップについてゆけずゴチャゴチャした印象を与える。演奏時間からみるとパリ・ノートルダム大聖堂でのネルソンのライブ演奏やガーディナーの録音に匹敵し、鈴木雅明よりも速い。このスピードでメリスマを歌いきるには、合唱団の技量が達していないといえるだろう。第17曲b「待ち望む」は速いテンポになんとかうまく収

まっている。

3. 合唱のできばえ

なんといってもソプラノは全体に健闘している。とのバランスも良い。何より音がまとまって響いている。直前の舞台練習まで指揮者に叱咤激励され続けたせいも、日頃のおっとり感を排してひたむきな気迫が感じられる。高音域はコンサート会場では伸びて美しく響き、他のパートを圧倒する勢いである。以前の月報[592・593号(2011年10、11月合併)]にも書いたことであるが、バッハの声楽曲では多くの声が混じり合い溶け合ったときの力強さと響きの美しさが大事であり、まさにそのとおりのことが現出したといえる。

出だしの音の不安定さとはばらつきはアンケートでも指摘されたように何曲かでみられる。第7曲b「世の罪除くもの」のアルト、第11曲「全能なるみ父」のバス、第13曲「肉をとりて み霊により」のテノールの途中からの入りなどで顕著。特にテノールでは音程が決まらないと単声に近い響きになる傾向にある。

曲の終わり方の不揃いになるのも気になる。最終和音に入る直前の間がそろっていないため、せっかく最後が決まっても締まらない印象になっている(第13曲「肉をとりて み霊により」など)。

さらに気になる点はアルトの声の弱さ(音量の小ささ)である。もともと人間の耳の感性からアルト音域はソプラノより不利であり、第12曲「み神のひとり子なる」のソプラノとアルトの二重唱では、プロ同士でも前者の高音の響きに後者の中音域が聞き取りにくくなる。しかしそれだけではないように思える。ソプラノは9人である音量を出しており、上手い下手以前の問題で一人一人がもっと大きな声を出す意識が必要である。第1部「聖なるかな」と第2部「ホサンナ」ではそのアルトが2分しており、合唱フーガではアルトが歯抜けになって聞こえる。狭い反響の良い練習場ではその弱点が顕在化しなかったためと思われる。

バスの声も通奏低音に負けている場合が目立つ。第18曲a「聖なるかな」の中でバスが主役の箇所では、もっと朗々とパイプオルガンのように響いて欲しかった。これについては、男声の横一列の並び方に問題があると考えられる。パート内の声のまとまりやコアメンバーとそれ以外とが補い合う意味でも、並列で後方にコアメンバーが控える方が有利である。また第15曲「主は甦りたもう」におけるバス斉唱はいただけない。せっかくの見せ場であるにもかかわらず、5月以降の歌詞割りの変更が徹底されていなかったのは残念である。

もう一つ触れなければならないのは、日本語の問題である。ソリストの日本語は単声であるので聞き取りやすかったはずであるが、合唱のそれはどうだったのだろうか。バッハ自身のドイツ語の歌詞割りも錯綜することが多く、リヒターの演奏でも聞き取りにくい箇所が多いが、ここぞというところはそろっている。以

前にオケの方から、舞台でもさっぱり言葉が聞き分けられないから日本語オペラなどの発声法を研究してはどうか、という指摘をいただいている。合唱で日本語を明確に伝える難しさは、当合唱団の根幹にかかわる重要な問題であり、以前から言われているが多方面からの検討が必要である。

4. 《口短調》は続く

自分のことは棚に上げていろいろ重箱の隅をつつくようなことを書いてきたが、ひとえにこの合唱団とともに私自身が成長したい、上手くなりたい、もっと客を集めたいという単純な意図のもとであることを承知していただきたい。私自身に楽理的また宗教的基盤がないため《口短調ミサ曲》の本質とは離れた議論であることは認めざるをえない。

われわれの演奏のCDを聞いたあとに改めて鈴木雅明とカール・リヒターの演奏を聴き直した。どちらも以前の月報で絶賛した演奏である。その評価は自分が《口短調ミサ曲》を歌い上げた今でも変わらない。鈴木の一分の隙もない演奏はやはり立派であるし、これだけの完成度はプロとはいえ並々ならぬものがある。世の中には歌詞が違っていたり、ソプラノがこれ見よがしにギンギンに歌う明らかにバランスのおかしい演奏も結構出回っている。そしてやはり、真打ちはりヒターとミュンヘンバッハ合唱団である。第18曲a「聖なるかな」の中で、雲がたなびくように響く声の厚みと神々しいまでの深みは、鈴木とリヒターの精緻な演奏では唯一欠けるものである。続く第18曲b「天地はみな」における合唱フーガの迫力は合唱団の独壇場といえるだろう。しかしながら、われわれの演奏を締めくくる第23曲「平和をわれらに」の合唱の充実ぶりや盛り上がりを見ると、東京バッハ合唱団もまんざらではないと思えてくるのは身びいきに過ぎるであろうか(ただしこの終曲の合唱にはソリストも参加している)。われわれの演奏が目指すものは指呼の間というにはちょっと無理があるかもしれないが、団員の本番での勝負強さと粘り腰は確かに伏在するようであり、これには全く感服しました。

一昨年の夏の集中練習(私はそこから入団した)以来持ち歩いた楽譜はボロボロで分解寸前であり、たくさんの書き込みやマーキングも懐かしい。私は野外で仕事をするすることがあり、そのとき持参する地形図に全ての事前情報を集約し、現地であれこれ他の書類を引っ張り出さないですむようにするのが流儀である。その地形図にあたるものが楽譜であり、正にあれこれ書き込んでいく。演奏会を終え、あらためて自分の演奏をふり返ると、とてつもない巨大な山塊にとりついた方がいいが、結局は末端でうろろしていたに過ぎないような気がする。前途はあまりにも広大かつ深淵であり、《口短調ミサ曲》の楽譜には、まだまだ本棚でお休みいただくわけにはゆかないようである。<了>

合唱団の2011年を振り返る

加藤 剛男（団員・バス）

東京バツハ合唱団の2011年は、画期的な年でした。年間を通じて特筆すべき内容に溢れていました。その足跡を振り返ってみたいと思います。

第105回定期演奏会

2011年1月9日、石橋メモリアルホール。カンタータBWV111、68、147、モテットBWV230。アンコールで、モテット終曲の「アレルヤ」を歌った後、定演としては初めてのことでしたが、カンタータ第147番の「コラール イェス わが喜び」（「イェス わが心の愉しみ」第10節）を、聴衆といっしょに歌いました。ホール全体の大合唱となり、客席と合唱団がまさに一体となり、バツハ時代の民衆とコラールのつながりを思わせるものでした。[月報584号（2011年2月）に詳細]

「創立50周年記念ファンド」の創設

合唱団の財政的基盤の確立と50周年記念企画への助成、および将来への基金として創設されたものです。

- ・募金の目標額：500万円
- ・募金単位：1口、1万円（500口）
- ・募金期間：2011年1月～2014年12月

[月報583号（2011年1月）に詳細。2011年末現在、達成額100万円（応募55名）]

月報連載「バツハ合唱団をとりまく人々」（全8回）

『東京バツハ合唱団 三十年の歴史』（大村恵美子著、1992年刊）に登場した方々（計171名）の、その後の消息などを、現在わかる範囲でたずねてみようとする、大村先生の連載記事です。「月報」2011年2月号（584号）に始まり、本年1月号（595号）で最終回となりました。

大村先生の傘寿を祝う葉山散策の会

3月6日、7日。先生は同月9日で80歳を迎えられました。自然のお好きな先生とご一緒に、逗子・葉山散策でお祝いをいたしました。7名参加。年齢を重ねるごとにバツハの音楽的解釈が深まり、指揮も円熟さを増し、お身体も壮健であられる先生の生き方に、ただただ敬服いたしております。[月報584号（2月）に詳細、586号（4月）に後援会員・青木道彦氏による報告]

『バツハ コラール・ハンドブック』刊行

大村恵美子・大村健二編、3月20日・春秋社刊。[月報586号（4月）に詳細、587号（5月）に反響]

「第23回荻窪音楽祭」に参加

5月15日15:00、日本キリスト教団荻窪教会。ワークショップ&コンサート「バツハ《口短調ミサ曲》を日本語で歌う」。[月報588号（6月）に詳細]

創立49周年記念懇親会

7月4日、目白聖公会。小海基氏（荻窪教会牧師、テノール団員）により「バツハのエキュメニズム」と題して講演がありました。12月に演奏する《口短調ミサ曲》に焦点をあて、「復活の先取り」「天上的な明るさ」にあふれる同曲には「エキュメニズムの先取り」を感じる、また東京バツハ合唱団の姿こそ「エキュメニカル」に映ると語られました。[月報590号（8月）に詳細と講演要旨]

全国紙各紙で合唱参加を呼びかけ

前年より《口短調ミサ曲》日本語演奏への参加者を募るべく、マスコミへの積極的な働きかけがなされました。東京（2010/7/26夕刊）、同（2011/2/16夕刊）、朝日（6/27）、読売（11/29）、日経（11/30夕刊）、その他キリスト新聞（11/12）、音楽の友（12月号）など。特に6月27日朝日新聞朝刊の全面特集記事、文化の扉「はじめてのバツハ」では、「歌う」の項目で当合唱団の《口短調ミサ曲》日本語公演の計画と団員募集が紹介され、60件を超える問い合わせがありました。その中から7月には20名の新入団員があり、演奏の質的向上にも、また公演の財政面にも、大変な寄与がありました。

野尻湖で2年ぶりの合宿とコンサート

8月6日16:00、神山教会。5日～7日合宿。今年で、野尻湖畔の演奏会も第38回を数えました。演奏会後も、外国人の多い聴衆との温かな交流がありました。[月報591号（9月）に詳細]

第106回定期演奏会（創立50周年記念公演I）

12月3日14:00、杉並公会堂。《口短調ミサ曲》日本語演奏初演。東日本大震災のあった2011年に《口短調ミサ曲》で平和をわれらに 地に平和を と歌うことができたことは、特別な意味がありました。アンコールで聴衆と一緒に最終曲 平和をわれらに を歌いましたが、まさに聴衆との一体感を味わいました。冒頭の曲 キリエ の歌い出しで、世界初演の日本語演奏は、成功間違いなしの思いを与えてくれました。50年間バツハ演奏一筋で指導してこられた大村恵美子先生の、渾身の、また集大成ともなる演奏でした。[月報595号（2012年1月）に詳細]

クリスマス懇親会（納会）

12月19日18:30、目白聖公会。テノール村山英司さん、宮城幸義さんのお世話で、26名の参加者全員のスピーチ、なごやかなうちにも年末を締めくくるのにふさわしい祝会でした。手料理のご提供、バザーへの献品等、ご協力のみなさま、ありがとうございました。

スピーチ内容も《口短調ミサ曲》演奏の感動を語られる方が多くありました。「演奏者と聴衆との応答現象」がありました。《口短調》は、ラテン語で歌うのと日本語で歌うのとでは感動する所が違う。学生時代に東ドイツの合唱団が来日し、仙台で《マタイ》を聴きました。少年が半分の構成でしたが、涙ながらに歌うので

はなく、あっけらかんと歌い、そこに真実味があるように思われました。今回の演奏も共通していたように思われます」(テノール小海基さん)。「今回は、まさに感動でした」(バス森永毅彦さん)。「最初のキリエの部分でこれはいけると思いました」(バス松尾茂春さん)。「カンタータ第71番の第6曲「鳩の歌」を皆で合唱し、最後に大村先生より「バッハは海、無限です。自分のことに関心を限定しないで、取り組んでいきましょう」との言葉があり、充実した1年の締めくくりをいたしました。

荻窪教会のクリスマスで グローリア 演奏

12月25日。[詳細は以下をご参照ください]

2011年は、まさに創立50周年の前年にふさわしく、演奏でも行事面でも、それぞれに充実感を感じる一年であり、大いに感謝したことでした。

なお、「月報」バックナンバーは、当合唱団ホームページでご覧いただけます。写真もカラーで鮮明に表示されます。あわせてご参照ください。

<http://www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/Monthly/>

後援会員には毎月お届けしています。ご加入いただければ直近号よりお送りします。事務局へお問い合わせください。

荻窪教会でのクリスマス

第106回定期演奏会《口短調ミサ曲》の公演を終えて3週間後、2011年の降誕日(12月25日)は日曜日と重なりました。一団員としてテノールの一郭を強力に支えてくださった小海基牧師との1年を締め括るべく、また音楽祭や臨時練習、オケ合わせ会場として会堂をご提供くださった荻窪教会の皆さまへの感謝もかねて、各パート数人ずつの団員がクリスマス礼拝に列席させていただき、午後の愛餐会で《口短調》中の「グローリア」を歌わせていただきました。

グローリア

高き天(あめ)なる神に

地に平和

主の民にあれや (大村恵美子訳)

テキストは言うまでもなく、地上初のクリスマスの晩に、羊飼いらの頭上で歌われた天使の讃美の合唱“Gloria in excelsis Deo. Et in terra pax hominibus bonae voluntatis.”(ルカ2:14,15)。本来の所を得て、私どもも意義深い歌い納めをすることができました。

信森 かず子(団員・ソプラノ)

学生時代(中学・高校)の礼拝体験から「？」十年目の久しぶりの礼拝でした。

当日はクリスマス寒波襲来で、外は北風のとても冷たい日和でしたが、着いた荻窪教会内はとても温かい雰囲気につつまれていました。日頃の礼拝に参加でき



グローリアの歌い納め(12月25日、荻窪教会)。写真：市川義和氏(荻窪教会員、当団後援会員)提供

ない車いすの方や、ご高齢の方も参加していらっしゃいました。

礼拝内で、6月に生まれたばかりの「そら」くんという男の子の幼児祝福式と、ひとりの青年の洗礼式の場に同席することができました。若いお父さまにだっこされた「そら」くん[後援会員・市川義和氏のお孫さんとのこと]はとても可愛く、大勢の人びとの前でも、静かに小海牧師の祝福をうけていました。

いつも感じるのですが、小海牧師のお話(説教)は分かりやすく、飽きさせることなく、学生時代には眠くなるのが常で案じていた私ですが、時のたつのが短く感じられました。

礼拝後の愛餐会では、教会学校の皆さんの聖劇や成人の方の楽器演奏があり、バッハ合唱団もここで「グローリア」を歌わせていただきました。聴衆の皆さんは、しっかり私たちを見つめ、合唱を聴いてくださり、満足のいくものでした。

このような貴重な機会を与えてくださった荻窪教会や、大村先生に感謝しております。

小林 順子(団員・ソプラノ)

讃美歌をうたい、聖書を読み、牧師さまの説教をお聞きし、祈りをささげたのは、何年ぶりでしたでしょうか。娘がプロテスタントの学校でしたので、当時クリスマス礼拝といえば、学校の講堂での礼拝で、パイプオルガンやハンドベルの音楽が奏でられておりました。社会も今ほど緊張する深刻な問題もなく、私自身の祈りも、今とはすこし違っていたかも知れません。

日本が経済でもひどい低迷をつづけ、またそれに加え、私たちが押しつぶすかのように大災害が起こり、日本人の誰もが暗く、希望を見失いそうなこの時期に、今回出席させていただいた荻窪教会でのクリスマス礼拝は、たんに礼拝というより、もっと大きく深い意味があるものと感じさせられました。

小海牧師の説教は、そこに集う者すべてを勇気づけ、希望を与え、癒し、そしてそれがすべて主イエスの愛であり、導きであることを改めて諭してくださったように思います。本当の心からの祈りとは、こういうこ

となのだと、今さらながら胸の熱くなる思いがいたしました。幼児が父親に抱かれ、祝福をうける姿を見ながら、その清らかな瞳に、だれもが健やかな成長を願ったことでしょう。ほんとうに厳粛ななかにも心暖まる良い礼拝でした。

バッハ合唱団に7月に入って以来、12月の演奏会までの半年間は、初めての連続で戸惑いのなか、本来の歌の心を忘れ、ただ音符を追っている自分に気づきました。バッハを歌うということ、神を賛美する歌をうたうということの本当の意味を、いまいちど考える機会を与えてくださった気がします。

小海牧師はじめ荻窪教会のみなさま、また今回この機会を与えてくださった大村先生、合唱団のみなさまに深く感謝したいと思います。ありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。

千葉 光雄(団員・バス)

昨年の12月25日、日本キリスト教団荻窪教会のクリスマス礼拝後の愛餐会において、《口短調ミサ》の中の第4曲 a グロリア と同 b 地に平和 の2曲を合唱団の有志(ソプラノ 3名、ソプラノ 3名、アルト4名、テノール4名、及びバス3名)で歌う機会が与えられました。

その日は奇遇にも、日曜日がクリスマスの当日。大村先生とオルガニスト金澤さんをはじめ、ほとんどの団員が10時半からの礼拝に出席させていただきました。通常の礼拝のほかに、幼児祝福式、洗礼式そして12月の召天者の紹介など盛沢山の内容でした。それに教会の聖歌隊によるすばらしいクリスマス聖歌の讃美もありました。当合唱団のテノール団員でもある小海牧師によるクリスマスメッセージ「天の讃美、地の讃美」も聞くことができ大変すばらしい礼拝でした。ふだんの練習時はいつもにこにこされながらみんなと一緒に懸命に練習に励んでおられる先生の、当日お忙しい中にも堂々とした牧師ぶり(当たり前ですが)そして礼拝説教には大変感銘を受けました。

礼拝後の愛餐会は、子供たちによる楽しいクリスマスの降誕劇や洗礼を受けた方の紹介があり、その後に合唱団の出番となりました。当日は、各パート数名の少数精鋭(?)の緊張感もあり、また事前の音合わせもない不安もあったが、ゆったりとしたテンポで金澤さんによるオルガンの前奏が始まると《口短調ミサ》の懐かしい世界に身を委ね、全員精一杯歌うことができました。歌った グロリア と 地に平和 の2曲は、未曾有の災害に見舞われたこの年に歌われるにふさわしい内容の曲で、日本語で歌われた歌詞の内容とバッハの旋律は、会堂に集われた方々の耳に、そして心に入っていったことと思います。この年の最後にこのような素晴らしい機会を与えられたことを心からうれしく思いました。

ドレスデンのヴァルブレヒトご夫妻より

ドレスデン、2011年11月23日

大村恵美子様

東京バッハ合唱団がめでたく50周年を迎えられますことを、心からお喜び申し上げます。

あなたがなさっている、こうしたバッハの多数の作品の日本語による演奏は、福音をのべ伝える奉仕のいとなみです。バッハの音楽(したがってまたその歌詞)とその日本語による演奏には、果てしはありません。

私は、あなたとともに、また東京バッハ合唱団および東京カンタータ室内管弦楽団とともに、演奏した経験を、いつも感謝の気持ちをこめて思い起こします。福音をのべつたえる奉仕は、今後も、演奏する者にとっても聴く者にとっても祝福でありつづけることでしょう。

あなたに、またすべての共演者に、ご多幸を祈ります。敬意と感謝をこめて。

ゲルハルト ヴァルブレヒト
幸子 ヴァルブレヒト
(訳・森永毅彦)

ヴァルブレヒト家については、「バッハ合唱団をとりまく人びと」の第5回でご紹介しました。ゲルハルト氏は、幸子夫人とともに1980年代に東ドイツから来日され、以来10年以上にわたって、新日本フィルのヴィオラ奏者として活躍されましたが、その間、スケジュールの許すかぎり当合唱団の定期公演でも協演していただきました。

1988年の第2回ドイツ演奏旅行には、末娘のすみれ(ヴィオラ)さん(当時10歳)が団員として参加されましたが、バッハの生家のあるアイゼナハ(ヴァルブレヒト家も代々この地で牧師職にあったそうです)の、バッハ像の前での、お祖父さまとの感動の再会シーンは、今も旅行参加者たちのまぶたに焼きついています。

ちなみに、ドレスデンは《口短調ミサ曲》にとっても因縁浅からぬ都市で、前半のミサ部分は、ここに宮廷を構えたザクセン選帝侯に献上されたものでした。

ヴァルブレヒト家の人びとにも、ドレスデンの街並みにも、再会を夢見ています。

新シーズン(2012年-2013年)の活動予定

<2012年>

- 1月...練習開始、《マタイ受難曲》先行
- 5月...荻窪教会演奏会「合唱・コラル・聖書朗読による《マタイ受難曲》」(詳細続報)
- 6月...《クリスマス・オラトリオ》前半とカンタータ71番、練習開始
- 7月...創立50周年祝賀懇親会
- 8月...野尻湖合宿、神山教会演奏会
- 11月9日...第107回定期演奏会《クリスマス・オラトリオ》前半、カンタータ71番(18:30、杉並公会堂)
- 11月...《マタイ受難曲》仕上げの練習開始

<2013年>

- 3月30日...第108回定期演奏会《マタイ受難曲》(14:00、紀尾井ホール)
- 4月...次シーズンのための練習開始:《クリスマス・オラトリオ》後半、カンタータ76番、《ヨハネ受難曲》